

探究学習を軸にした学校改革

全校体制で資質・能力ベースの  
指導改善を推進し、  
自己実現への「志」を育む

変革のステップ

背景と課題

- 学習態度が受け身がちな生徒が増えていた

実践内容

- **「課題探究」の導入** 試行錯誤しながら課題を乗り越える経験を積ませるため、1・2年次に「課題探究」を導入。1年次は、笠岡市教育委員会との連携の下、地域課題への対応を通して社会への視野を広げさせ、2年次は、社会とのかかわりを考えながら自分の関心を深めさせることにした
- **カリキュラム・マネジメントの推進** 自己実現に向けた生徒の「志」を全校体制で育めるよう、新たな学校教育目標と「育てたい資質・能力」を策定。教師間の目線合わせを強化し、カリキュラム・マネジメントを推進する体制を整備した
- **ルーブリックによる評価の導入** 「育てたい資質・能力」の育成状況を測るために作成したルーブリックを用いて、生徒にも自己評価をさせている

成果と展望

- 学習意欲が高く、明確な希望進路を持つ生徒が増加
- 地域から「生徒の全人的な力を伸ばそうとしている学校」と評価されるようになった

PROFILE



旧制・笠岡町立笠岡女学校として創立。校訓に「自律・創造・友愛」を掲げる。創立当時、同校の近くにあった笠岡湾で千鳥の飛ぶ姿が見られたことから、「千鳥」が同校の愛称となった。また、部活動が盛んで、加入率は約9割に及ぶ。

設立	1902(明治35)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約200人

**2019年度入試合格実績(現浪計)** 国公立大は、東京工業大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、岡山大、香川大、九州大、岡山県立大などに106人が合格。私立大は、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ287人が合格。

住所	〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡3073-2
電話	0865-62-5128
Web site	<a href="http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp">http://www.kasaoka.okayama-c.ed.jp</a>

生徒の気質の変化に対応し、「志」を育む指導改善に着手

岡山県立笠岡高校では、2017年度から、高い目標を設定し、その達成を目指す意欲的な生徒を育成すべく、指導改善を推進している。同校がそうした方針を打ち出した背景には、生徒の気質の変化がある。少子化などの影響により、同校への入学志望者が減少傾向となり、高校入試の易化が不可避だった。そのため、中学校時代に一生懸命勉強して同校の合格を手にしたといったような生徒は以前に比べると少なくなっており、学習態度が受け身がちな生徒が目立つようになってきた。そうした中、同校は17年度入試で、9年ぶりに東京大学の合格

者を出した。その生徒は、もともとは別の大学を志望していたが、2年次に東京大学が実施した研究室ツアーに参加し、関心があった農学部の実験室の模擬講義を受講して大学の学びの楽しさを知ったことがきっかけとなり、同大学への挑戦を決意したという。成績が伸び悩む時期



**進路課長**  
**澤 顕義** さわ・あきよし  
教職歴21年。同校に赴任して13年目。「生徒に様々な活動の機会を提供し、生徒が成長を実感できるように支援していきたい」



**進路課長補佐**  
**定藤 芳樹** さだとう・よしき  
教職歴22年。同校に赴任して5年目。「生徒とともに学び、ともに成長していける教師でありたい」



**2学年主任**  
**山本 晃** やまもと・あきら  
教職歴18年。同校に赴任して3年目。「生徒よりも努力し、生徒とともに成長できる教師でありたい」



**1学年主任**  
**森腰 巧** もりこし・たくみ  
教職歴9年。同校に赴任して7年目。「教師が教えるのではなく、生徒が何をできるようになるかを考えた指導に力を入れていきたい」



**進路課3学年責任者**  
**中桐 裕** なかぎり・ゆう  
教職歴7年。同校に赴任して5年目。「授業を通して考える力を身につけさせるとともに、考える楽しさを伝えたい」



**進路課1学年責任者**  
**植月 典久** うえつき・のりひさ  
教職歴7年。同校に赴任して4年目。「生徒一人ひとりと真剣に向き合い、その可能性を最大限に引き出したい」

もあつたが、粘り強く学習し、合格を勝ち取ったと、進路課長の澤顕義先生は語る。

「その生徒の姿から、自分のやりたいことに挑戦しようとする『志』を持つことが、頑張り続ける力につながるのだと、改めて実感しました。また、社会の急速な変化に対応していくためには、自分で課題を見つけ、問題解決を図っていける、そうした資質・能力が求められます。そこで、その育成に向けた指導改善に着手しました」

## 市と連携した探究学習で、地域貢献への意欲を醸成

同校がまず取り組んだのは、1・2年次の「総合的な学習の時間」を中心に行っているキャリア教育プログラム「ACT（\*1）」の見直しだ。以前は、大学の学部・学科調べや進路講演会などで構成された進路学習に重点を置いていたが、17年度1学年からは、進路学習に加えて、生徒が社会的な課題と向き合う「課題探究」を実施することにした。

「教師から指示された学習にはしっかりと取り組めますが、指示がないと動けない生徒が少なくありませんでした。そこで、答えが1つではない問いに向き合う経験を通して、自分で判断し、行動することの面白さを伝えたいと考えました。うまくいかないことも多いと思いましたが、試行錯誤をしながら課題を乗り越えていく経験は、生徒に『やればでき

る』という自信を与えるでしょう。そうした成功体験が、困難な状況においても自己実現を目指す『志』の醸成につながるのではないかと期待を持っていました」（澤先生）

1年次の「課題探究」では、生徒が5人1組のグループに分かれ、地域課題への対応を図る「地域学」に取り組む。地域の実態に即した取り組みになるよう、笠岡市教育委員会と連携し、「遠隔地の救急医療体制の確立」「笠岡駅前活性化」など、市が重要課題として位置づけるテーマを毎年複数提示してもらったことになった。各グループは、その中から関心のあるものを選び、テーマごとに市の職員の講演を聞いたり、職員とともにフィールドワークを行ったりしながら、課題への対応策を考えていく。また、文献の調べ方やアンケート調査の方法など、探究学習に必要なスキルを学べる、大学教員による研修会も実施。そして、探究学習の結果をポスターとレポートにまとめ、3月の発表会（\*2）で、市の職員や保護者らに発表する。17年度1学年を担当した中桐裕先生は、地域課題に取り組ませるねらいをこう話す。

「本校の卒業生の多くは、大学進学や就職で地元を離れます。他地域から故郷のことを考える人材も必要ですし、地元で働きながら、地域のために頑張る人材の育成も大切です。生徒には、『地域学』に取り組んで地域貢献への意識を高めてほしいと思っています」

2年次の「課題探究」は、「テーマ探究」と

\*1 自ら行動し、自ら考え、自分の力で創造する生徒を育てたいという思いを込め、「Active」「Creative」「Thinking」の頭文字を取って命名。  
\*2 現在は、1年次の12月に発表会を実施している。

題され、生徒一人ひとりが自由に設定したテーマの探究に取り組む。「地域学」で習得した探究学習に必要なスキルを活用してデータを収集したり、似たテーマに取り組むクラスメートと議論をしたりしながら探究し、論文を作成する。

『「地域学」を通して、生徒は社会への視野を広げます。そこで、『テーマ探究』においては、社会とのかかわりを考えながら自分の関心を深めさせることにしました。例えば、福祉関係の職業に就きたいと考えている生徒が、日本とスウェーデンの福祉制度を比較するなど、希望進路と関連させたテーマを設定する生徒も少なくありません』（澤先生）

### 探究学習に取り組む中、「志」と責任感を抱いていく生徒たち

「地域学」は同校で初めての探究学習だったため、取り組みを始めた当初は、生徒に求める発表の水準などが分からず、教師も戸惑うことが多かったという。それでも、生徒の成長に寄与している実感があつたから、取り組みを継続できたと、2学年主任の山本晃先生は話す。

「地域課題と向き合う中、最初は控えめだった生徒が積極的にアイデアを出さず、少しずつ主体性が育まれていると感じます。それは、『自分でできる地域貢献を実現したい』といった思いが強くなっていったからでしょうし、そうした『志』を抱く生徒の姿に、私たちが励まされました」

17年度の「地域学」では、「笠岡駅前の活性化」のテーマに取り組んだグループが提案した「笠岡駅前イルミネーションの設置」というアイデアが市に採用されるなど、教師の期待以上の成果が上げられた。さらに、「地域学」が終わった後には、どのようなイルミネーションを設置するか、近隣の他校の生徒と協働で考案してほしいと、市から追加の協力要請を受けた。すると、そのグループの生徒は、『アイデアを出した自分たちが本校の代表として、他校の生徒とともに取り組みたい』と名乗り出たという。

「生徒たちの表情からは、『自分たちで責任を持ってやり遂げたい』という意欲が伝わってきました。主体的に課題と向き合うことのできるやりがいや面白さを実感できたのだと思います」（中桐先生）

### 全校体制での指導改善に向け、新たな学校教育目標を設定

学校が一丸となって生徒の「志」を育成できるように、指導体制の整備にも力を入れた。18年度には、「志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる」という新たな学校教育目標を打ち出し（図1）、その達成に向けた「求める生徒像」「育てたい人間像」「育てたい資質・能力」を策定した。進路課長補佐の定藤芳樹先生は、策定までに留意した点を次のように語る。

「改めて本校が目指す教育の方向性を明確にし、カリキュラム・マネジメントを推進し

#### 笠岡高校の教育方針

図1

##### ◎学校教育目標

志高く自らの人生と社会の未来を拓く人を育てる

##### ◎求める生徒像

- 夢の実現に向けて主体的に学ぶことのできる生徒
- 広く社会に目を向け、さまざまなことに挑戦する意欲を持った生徒
- 生徒会活動、部活動、ボランティア活動等に積極的に取り組み、リーダー性や協調性を発揮できる生徒

##### ◎育てたい人間像

- 知・徳・体の調和のとれた人格を身につけた人
- 新しい時代に必要な6つの力「未来開拓力」を身につけた人
- 生涯にわたって主体的に学び続け、地域社会やグローバル社会に貢献できる人

##### ◎育てたい資質・能力 未来開拓力

社会の中で役割を果たしながら自分らしい生き方を実現し、新しい知や価値を創造していくために必要な6つの資質・能力を「未来開拓力」と定義。

- 教養力…幅広い教養と課題発見・解決のための知識・技能
- 思考力…論理的に考え、批判的に掘り下げ、創造する力
- 表現力…思考・判断の結果や経過を分かりやすく伝える力
- 協働力…多様な他者とコミュニケーションをとり、協力する力
- 省察力…自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力
- 志力…志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力

\*学校資料を基に編集部で作成。

たいと考えました。しっかりと合意形成ができるよう、教師間で協議を重ねました」

「育てたい資質・能力」について検討したのは、若手教師を中心にしたワーキンググループだ。具体的には、「省察力」「志力」などの6つとし、

それらを「未来開拓力」と総称していると、グループの一員である植月典久先生は話す。

「生徒や教師が日常的に学校教育目標を意識できるよう、『育てたい資質・能力』の数を絞ることに留意しました。大切にしていることのすべてを『○○力』と列挙するのではなく、主体性と挑戦する意欲などをまとめて『志力』とするなど、吟味を重ねました」

### 「未来開拓力」のルーブリックで、資質・能力ベースの指導を強化

22年度から年次進行で実施される次期学習指導要領に向けて、18年度には、2つの学校設定教科・科目を新設した。

1つめは、英語の4技能の総合的な向上を目指して全学年に設定された「Global English」だ。2年次に、1年次の教科書をもう一度用いて知識・技能の定着を促した上で、3年次には、英語による思考力・判断力・表現力を伸ばすため、プレゼンテーションの練習を主軸に据えた。

2つめは、1・2年次の探究学習に続き、既習の知識・技能を活用し、考察できる資質・能力のさらなる育成を図る「探究」だ。理系では、2・3年次に設置した「自然科学探究」において、理科や数学、情報の学習内容を組み合わせた課題などに取り組み。文系では、3年次に設置した「人文社会探究」において、グループで人文科学の文献などを講読し、その内容について議論をした後、生徒一人ひとりが文献のテーマに

対する自分の考えを文章にまとめる。

19年度からは、生徒に「未来開拓力」を自己評価させるルーブリックを作成し(図2)、それを活用したeポートフォリオを構築している。例えば、体育祭や文化祭といった学校行事の後、生徒が自己評価を入力し蓄積していく。また、各学期の最後には、学期全体を通じた学習や生活などについての振り返りを行う時間も設けていると、1学年主任の森腰巧先生は話す。

「以前も行事の後には感想を書かせていましたが、生徒は何を書けばよいのか分からず、漠然とした内容になることもありました。ルーブリックによって振り返りの視点が明確になったことで、生徒は自分の課題を把握しやすくなったようです。『未来開拓力』の中から自分に足りない資質・能力を見つけ、その

向上を目指すなど、目標を持って行事に取り組む生徒が増えました」

### 「未来開拓力」を教育活動の柱とし、「志」をさらに伸ばす

一連の指導改善は、大きく実を結んでいる。例えば、「課題探究」に取り組む中で、高い「志」を抱く生徒が増えたことは、前述した通りだ。そうした意欲は進路選択にも表れ、「課題探究」で向き合ったテーマを追究するという観点から、大学・学部を選ぶ生徒も少なくなっている。また、教科学習においても、自分で課題を見つけ、それに取り組む生徒が増え、旧帝大などの最難関国立大学の合格者数の増加につながっている。

地域からの同校への評価も変わった。以前は「教科学習にしっかり取り組ませる学校」といった見方だったが、現在は「生徒の全人的な力を伸ばそうとしている学校」として注目されるようになった。「地域学」などを通して、資質・能力ベースによる指導改善の成果が地域に伝わっていることがうかがえる。

澤先生は、今後についてこう語る。

「20年度から、特別活動におけるキャリア教育などについてのポートフォリオ『キャリア・パスポート』の活用が、小・中・高で始まります(\*3)。それを見据え、教育活動を全般で、生徒の『未来開拓力』への意識をさらに高められるよう、指導改善を続けていきたいと考えています」

図2 「未来開拓力」のルーブリック

資質・能力・態度	省察力	志力
シーショ ケカ 協一 高め	自らの行動を振り返り、改善し、前に踏み出す力	志高く挑戦し、主体的に人生や社会の未来を拓く力
レベ ル 1	自分の行動を振り返り、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動につなげることができる。	高い志を持って将来の生き方や地域・国内外の未来を自分の将来を設計することができる。
レベ ル 2	自分で目標を立てることができる。	物事を前向きに捉え、社会の一員としての自覚を持ち、将来の進路について考えることができる。
レベ ル 3	自分の目標と現実の差を見つめることができる。	さまざまな活動に挑戦し、社会の抱える問題に目を向け、自分の適性に対する理解をしようとする事ができる。

「未来開拓力」を構成する6つの資質・能力それぞれについて、5段階の達成目標を設定し、様々な教育活動の振り返りに活用している。 \*学校資料を基に編集部が一部改編。

\*3 文部科学省では、「キャリア・パスポート」について、「記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない」としている。